

研究委員会企画シンポジウム 2 SK02

教室への社会・文化的アプローチ

企画・司会:

話題提案者: 1. ネパールにおけるバザールの算数

2. 学校外での生物学的知識の獲得: その動機づけの条件

3. 教室のことばのジャンル

4. マイクロジェネティック・アプローチによる教室行動の理解

指定討論者:

田島 信元 (東京外国語大学)

上野 直樹 (国立教育研究所)

稲垣佳世子 (千葉大学)

茂呂 雄二 (国立国語研究所)

上村佳世子 (早稲田大学)

無藤 隆 (お茶の水女子大学)

吉崎 静夫 (日本女子大学)

企画主旨:

田島 信元

教授・学習過程ないし教室行動が、最近、社会・文化的観点からの見直しが行われている。それは我々に、社会・文化・歴史的な文脈のもとに教育、学習、さらに学校の機能というものを捉えなおしていくことを要請するとともに、教育とは何か、学習とは何か、あるいは学校とは何か、ということについて発想の転換と、現代・近未来社会の学校教育のあり方について具体的な提案の提出を要請している。

このような動きの背景には、学習や発達を個人内機能としてのみ焦点化してきたことへの疑問と反省があることは事実であろう。その端緒を開き、また、精神発達にかかわって学校教育の意義を検討したVygotsky, L.S.は、その前提として高次精神機能の発達には心理的道具である言語・記号による媒介が必須であると考えていた。それゆえ人間活動は常に「主体-媒体(道具)-対象」という三者(項)関係で捉えられなければならないとする。心理的道具としての言語・記号の媒介により、子どもが大人と共に、彼らの活動の場となる社会に参加、適応、創造していくプロセスを強調するのである。

Bakhtin, M.M.はVygotskyと同様、社会過程における媒介手段としてコミュニケーションの道具である言語を採用した上で、社会過程に広くかかわる彼独自の精巧な言語概念を提案し、さらに、それがいかに社会・文化的な力を持ち、個人内精神機能へかかわっていくかという具体的なメカニズムのモデルを提供している。彼はまず主体が発する発話を構成する声(voice)に注目する。この声というのは、主体の意思・志向と、それを表すアクセントや音声によって特徴づけられるが、それだけでなく、主体が発話する相手(対象)や場面(文脈・社会的環境)の意思・志向をも反映しているという点を強調するのである。その意味で、発話は常に多声性(voices)を帯びているといえる。つまり、ある発話(声)は決して話す主体によって任意に決定

されるのではなく、最初は相手・他者の声を借りる(他者の声を通して話す: 服話する)ことから始まり、そこで自己の声と他者の声が出会い、衝突しあうような内的な対話過程を通して、主体の声が成立するのである(対話性原理dialogicality)。こうして発話主体は、常に他者や文脈に依存し、かつ、それらと不可分・一体の存在となるというわけである。ここで他者の声とは、目の前の相手の声も含むが、より重要な声は、社会的言語(social language: 社会階層・サークル・学校、役所などの制度・権威者などに特有の言葉や流行語など)ないし発話のジャンル(speech genre: 挨拶言葉やテーブル会話など)と呼ばれるより広い文脈で使われるものであり、これらの社会的方言の声と自己の声との内的対話過程を通して、発話の主体は現実には彼が所属する社会の社会・文化・歴史的要因と不可分な関係を結ぶことになるのである。

以上のようなVygotskyやBakhtinらの理論から考えると、たとえば学校の教師が知識を生徒に伝達するというような場面でも、一方向的なコミュニケーションの流れがあるというより、生徒の中で学校世界の声と自己の生活世界の声とがぶつかりあい、対話することにより、知識が生徒の中に形成される(主体的に形成することになる。つまり、これは主体側からみると教師の情報は教え込まれる(instruction)ではなくて、染み込んでくる(osmosis)のである。その意味で、教師側からみても生徒に効率よく知識が形成されるためには、生徒が学校世界に対し、所属したいという意欲、知識を取り込みたいという意欲を持たせることが最も大事な教育的働きかけのひとつになるといった示唆などがでてくることにもなると思われる。

今回のシンポジウムでは、狭義の教室における教授・学習過程をより豊かにするための諸条件を、認知心理学的観点を含む広義の社会・文化的アプローチの諸成果を展望することにより、探りだしていくことを目指してみたい。